

いのち 生命の輝きの倫理学 (4)

— 「中絶小説」ならびに「生命倫理小説」の可能性 —

西永 兼康

The Ethics of “Brightness of Life” (4)

The Possibility of the “Abortion Novel” and the “Bioethics Novel”

Kaneyasu Nishinaga

1 はじめに

著者は「生命(いのち)の輝きの倫理学」と題し、論を進めてきた。すなわちその1として「その10の提題」、その2として「妊娠中絶の倫理的課題」、そしてその3として「生殖医療の倫理的課題」である¹。そこで著者が一貫として問題としてきたことは、人にとって生命が輝くとは如何なることか、ということであった。確かに現代の生命倫理の諸問題——たとえば人工妊娠中絶の問題、生殖医療の問題、さらには終末期医療の問題や臓器移植の問題——は、従来の倫理的価値観を覆し、新しい課題を我々の眼前につきつけているのであるが、それらの問題群を論じるに際して、ともすればその新しい倫理的問題の是非にのみ目が奪われているようにも思われる。そこで著者は、このような現代の生命倫理の諸問題と向き合いつつも、その問題を通して人が如何に生きるのかを探求し、「生命の輝き」というキーワードによって、人生の諸問題を論考してきたのであった。

ところで我々が現代の生命倫理の諸問題を論及しようとする時に、重要な手段があると思われる。それは現代の小説である。小説においては当然ながら人が如何に生きるのかを問題とする。そしてそのような現代の小説にあって、生命倫理の諸問題を真正面から取り扱ったものがあるのだ。たとえば最近のものでは、人工妊娠中絶の問題を扱った山田宗樹の『天使の代理人』²、生殖医療の問題を扱った帚木蓬生の『エンブリオ』³がある。また少々古い臓器移植の問題を扱ったものとしては、加賀乙彦の『生きている心臓』⁴がある。それらの小説群を扱うことによって、現代の生命倫理の諸問題を視野に入れつつ、「生命の輝き」の視点から人が如何に生きるのかを探求するという、我々の「生命の輝きの倫理

学」の課題を果たすことができると思う。ここでは、まず人工妊娠中絶問題を扱った山田宗樹の『天使の代理人』を扱うことによって、「中絶小説」なる可能性を論じてみたい。

2 山田宗樹『天使の代理人』をめぐって ―人工妊娠中絶の問題

1) 『天使の代理人』という小説

ここには4つの物語が同時に進行する。その物語とも、妊娠や中絶をめぐって展開する。

喜多川麻矢は、十代の大学生である。何不自由ない生活を送っているが、母親との葛藤もあり、妊娠に至るが、中絶してしまう。

桐山冬子は、キャリア 20 年の助産師である。ある日、妊娠中絶手術に関わる中で、今まで自らが行ってきた中絶の手術に疑問を抱き、職を辞する。そして中絶に関する書物を仕上げ、中絶反対の声を上げようとする。その中で、病院で妊娠中絶の予約をした女性の住所を密かに記録し、その女性を個別に訪問し（このような行為は病院の守秘義務に反することは明らかであるが）、中絶の意志を再確認させ、可能ならば中絶を思い止まらせようとする「天使の代理人」なる運動を始める。この小説の主たる登場人物である。

川口弥生は、銀行のキャリアウーマンで、ひたすら仕事に没頭する。30 代になり、ふと仕事が空しくなり、独身のままで、どうしても子どもがほしくなる。そこでアメリカの精子バンクから「優秀な」精子をネット上で買い求めて、妊娠に至る。ただし欲しい子どもは自らのイメージから言ってどうしても男の子である。しかし超音波断層検査から妊娠したのは女の子であることを知るに至り、彼女は中絶を決意する。

佐藤有希恵は、20 代の女性で幸せな結婚生活を過ごし、待望の妊娠をする。しかし検診に行った病院で、誤って中絶させられてしまう。中絶を希望していた同じ「佐藤ゆきえ（雪絵）」という女性と取り違えられてしまったのであるが、ある出来事をきっかけにして有希恵はその雪絵と知り合う。雪絵は、有希恵との出会いによって、中絶を思い止まり、出産を決意する。

この4つの物語が同時進行していくのであるが、4つの物語が一つの物語に流れ込むのが、冬子が始めた「天使の代理人」の運動であり、また麻矢が立ち上げたホームページの掲示板を通してこれらの登場人物が関わっていくのだ。

2) 中絶とは何か？

①中絶するとはどのような行為か？

論文とは違い、小説の強みとは、人間の行為を微に入り細に入り描写できることである。たとえば中絶を扱う論文とは、その行為を客観的に論じる訳であるが、小説は違う。それがどんな行為であるのかを、細かく描写する。そしてこれが小説の決定的な力であるが、読む側をして感情移入させ、あるストーリーの中に読者を引き込むのだ。

たとえばこの小説には、随所に中絶するとはどのような行為なのかが記されている。まず冒頭がそうである。その冒頭の場面は、この小説の主人公である冬子が長年行ってきたその中絶手術の場面である。しかも後期中絶であり、法的には認められている 22 週未満のものではない。通常分娩の形を取りながら、外的にストレスをかけて、死産させるもので、実際には相当数行われていると言われているものだ。冬子は既に死亡している嬰兒を見る。少々引用してみる。

＜目に入ったのは、紫色の赤ん坊。無造作に放置されている。その口もとが、ぴくり、と動いた。冬子は目を疑った。のぞきこんだ。冬子の影が、赤ん坊の顔にかかる。赤ん坊の右目が、ゆっくりと、ひらく。黒く澄んだ瞳に、なにかが映る。醜い、異様に醜いそれは…。冬子の顔だった。＞⁵

忘れられない一シーンである。死んだ（殺された？）はずの嬰兒の目が、まだ生きているかのように動いているというのだ。そしてその嬰兒の目に、この中絶という行為に加担している自分の「醜い、異様に醜い」姿が映っているという。冬子はその瞬間に、「この子は、死なせない」と叫び、その嬰兒を抱きかかえてしまうのだ。結局のところ、その医師にもぎとられてしまうのであるが、あながち作り話とも言えない話であろう。

冬子はその時のことで、病院を辞め、この小説の題名でもある「天使の代理人」（つまり中絶させられる胎児という天使の代理人という意味）の運動を始めるのであったが、この一シーンは実に印象的であった。実際にこの嬰兒はその時には生きていたのだ。ただし装置によって圧力をかけられ、既に死に至るのは確実であるにしても、まだ嬰兒は生きており、確かに目を開いたのだ。冬子は、その子を抱き上げ、背中を叩く。「泣きさえすれば、呼吸さえできれば、きっと生きられる」⁶とあってである。しかしその嬰兒はやがて息を引き取る。一体このような行為は何であろうか。確かに「殺す」行為であろう。目も開いていたのだ。その目は「生きたい」と叫んでいたのかもしれない。そして我々はそのような瞳の中に、どのような自分の姿を映し出すのであろうか。

繰り返すが、このシーンは法的には認められていない後期の人工妊娠中絶の情景を小説という舞台の中で描き出したものであるが、法的には認められている 22 週未満の中絶に関してもこのような表現がある。一人の中絶した女性の叫びとしてのものである。

＜傷つかないで中絶できる女なんていません。両脚を縛られて、お腹のなかを引っかき回されるんですよ。軽い気持ちでできるわけないでしょう。どうせ男の人にはわからないでしょうけどね…。中絶はね、どうしても産んであげられなくて、仕方なく胎児を犠牲にする行為なんです。みんな苦しむ。ほんとうに苦しむんです。＞⁷

中絶とは、「苦しむ」「ほんとうに苦しむ」行為であるというのだ。この女性はその故にこう言わざるを得ない。「だから私は、いつも言っています。それだけ苦しんだのだから、赤ちゃんもきっとわかってくれる」⁸と。この後段の発言の是非はあろうが、中絶をもし擁護するのならば、頷いてしまうような言葉なのではないか。「両脚を縛られて、お腹のなかを引っかき回され」、苦しみ、傷つき、中絶する女性。その女性の姿がここには描かれている⁹。

ところで、この「天使の代理人」の運動は、当初はあくまでも当人と話し合い、気持ちを確認するだけのものであったが、だんだん積極的に中絶を思い止まらせようとするような運動へと変わっていったのであった。そしてその際に用いられるのが、中絶された胎児の写真であった。あなたのしようとしていることは、このような実態を持つものだと迫り来る語り口で、中絶を止めさせようとの決意を促しているのである。「天使の代理人」によって「説得」を受けた中絶する女性はこう語るのだ。

＜その女は、さらに別の写真を取りだしました。なんとそれは、中絶された胎児の、血まみれの写真だったんです。私は気分が悪くなって、吐いてしまいました。それでもその女は、その写真を直視しろと突きつけてきたんです。＞¹⁰

はたして我々はこのような写真を「直視」できるのであろうか。そもそも中絶するという行為とはどのような行為なのであろうか。それは女性が「両脚を縛られて、お腹のなかを引っかき回される」行為である。医師が長年の経験から、着実に胎児を潰すような行為が中絶の行為である。そして異物を除去する時に、潰された胎児の体が散逸し、後期の場合には、「殺された」嬰兒が母体の外に出されるような行為なのである。胎児へのストレスが十分ではなかったら、それこそ青息吐息の中で、目を開けて、こちら側をみつめるかもしれないのだ。

今、記した「青息吐息の中で、目を開けて」云々という表現は、この小説の冒頭のシーンから喚起された表現である。このようにこの小説は、中絶をめぐる様々な場面や表現をちりばめ、中絶とはどのような行為であるのかを、我々に改めてリアルに示してくれる。そして読む側は様々な思いを喚起させられてしまうのだ。

もし中絶の際の様々な写真を見せ付けられたら、中絶する者ならずとも、「気分が悪くなって、吐いてしま」うのかもしれない。実際に中絶の場面を描いた記録映画さえも存在する¹¹。しかしそれと違ってこのような小説の特質とは、そのような写真を直接見せるのではなく、小説というストーリーの展開の中で、リアルに描き出すということである。それこそが小説の強みということである。

②中絶は胎児殺人か？

このように描かれている中絶であるが、やはり問われる事柄とは、中絶とははたして「胎

児殺人」であるのかということである。そしてその問題とは、結局のところ、胎児は果たして人なのかという古典的な問題定式に逢着するのである。

この小説においても、そのことをめぐっての議論が一人の登場人物である麻矢が作成したホームページの掲示板で展開されている。その議論の担い手は主に、中絶を行った麻矢と、医療ミスで中絶させられてしまった有希恵、それに精子バンクにより妊娠するものの、個人的理由から中絶を決意するに至る弥生である。

麻矢にとって妊娠とは、「いきなりエイリアンに身体を乗っ取られたようなもの」¹²であるという。エイリアンとは、宇宙から来た新生物を指す言葉である。そして彼女にとって中絶とは、その未知なる物体であるエイリアンを取り除くところの当然の行為であるというのだ。もちろん彼女は「エイリアン」というのが、あまりにも大げさな表現であることに気付き、「腫瘍」¹³や「虫歯」¹⁴に例えてくる。自分の体に出来た異物としての腫瘍。その腫瘍を取り除くのは全く自由だし、ましてや虫歯のようなものなのだから、簡単に抜いてしまおうという訳である。もちろん議論はここで終るのではない。どう考えても胎児とは、腫瘍ではないし、虫歯でもない。ましてやエイリアンでもないからである。そこで彼女はある例を持ち出す。それはあるスポーツ選手の話である。あるスポーツ選手が、「オリンピックで金メダルをとる潜在力」を持っているとする。しかしそれだけでは価値はない訳で、実際にメダルをとって初めて世間に認められる。それと同じように、胎児もこの世に生まれ来て、初めて人間として認められるというのだ¹⁵。

この段の議論は、小説の中では医療ミスで中絶させられてしまった有希恵との掲示板でのやりとりを通して進んでいくのであるが、最後の論にもやはり無理があろう。有希恵自身が指摘しているように「メダリストになることと、胎児が一人前の人間として生まれることとは、まったく次元の違う問題」¹⁶であることは明らかなのだ。やはりこのような例えは無理がある議論なのだ。

ではなぜ、このような議論を、この小説の著者である山田宗樹は続けさせるのであろうか。それはこのような議論が、実際の生命倫理学の中でも展開されている古典的な議論だからである。それは例のジュディス・J・トムソンの議論である。山田はその議論を知っており、あえてトムソンの名前までも持ち出して、この議論を紹介している¹⁷。実にトムソンは「人工妊娠中絶の擁護」と題し、こう論じていたのであった¹⁸。ある男が朝起きてみると、見知らぬ男と背中同士がチューブでつながれている。その相手は有名なバイオリニストで、腎臓病を煩っている。この音楽家を支援するある団体が、この音楽家を生き延びさせるために、世界中の人を調査した結果、その男としか血液が適合しないことが判明して、音楽家の生命のために、その男の腎臓を借りることにしたというのだ。医師の話では、あと9ヶ月腎臓を借りることができたら、音楽家の病気は完治するという。もちろんこの男には、自分の腎臓を貸し与える義務はない。9ヶ月も不自由な思いを一方的に強いられるのだから、チューブを抜いてもらうことも全くの当然の権利である。そのような行為と

は「助けるのを中止して死ぬのを放置する」¹⁹だけの行為である。しかし自由なる意思をもって、チューブをつながせ、自らの腎臓を貸し与えることもできるのだ。もう説明を要しないであろう。この男とは妊娠した女性である。そして腎臓病の男性とは胎児である。胎児と9ヶ月の間、自らの体をつなぎ止めさせ、胎児の生命を永らえさせることもできる。しかしその反面にそのような一方的な不自由から逃れるために、胎児を自分の体から引き離す、つまりそれが中絶という行為となるのであるが、そのことも構わないということなのだ。

このような議論は、既に指摘したように無理がある²⁰。有希恵は中絶とは「助けるのを中止して死ぬのを放置する」ではなく「危害を加えて胎児を殺す」ことであると語り、このような比喩を持ち出すと、「論点がぼやけるだけ」であるとして、これ以上は議論はしないと語っている通りである²¹。しかしどうしてこのような議論を持ち出すのであろうか。それは、どうにかして中絶を認めたいという一念から来るのである。よって中絶を認めたいという結論は初めから出ているのである。そのような結論を持っている麻矢だからこそ、彼女はこうまでも語る、中絶という「この問題を複雑にしているのは、胎児が変に人間に似ているからだ」と²²。しかしながら、これも全く無理な発言であろう。胎児は「変に人間に似ている」のではない。少なくとも、たとえ胎児が人ではないにしても、誰しもが最低限認めることは、当然ながら胎児は「人になる潜在力をもった物体」²³であるということなのだ。そしてしかもその力を持ちつつ（いや持っているが故に）、その形が「人間に似ている」のだ。決して「変に人間に似ている」という訳ではないのだ。

この小説において、麻矢は本音とでもとれる言葉を発している。すなわち彼女は「見たことがないだれか」（すなわち胎児のこと）のために、「自分の時間やお金や若さを犠牲にしたくはありません」²⁴と語るのであった。これこそ本音なのであろう。もちろんその本音とは、また同時に悲しみに満ちたものであったにしてもである。

ここで議論を整理してみたい。どんなに議論を立ててみても、全くの問題なしに中絶が正しいという議論は導きだされてはこないということである。理屈を立てようすると無理が出てくるのだ。ここで中絶に関して通常なされる一つの重要な議論を振り返ってみたい。それは大別されると、「線引き論」と呼ばれるものと、「パーソン論」と呼ばれるものである。

線引き論とは、中絶はどこまでならば認められるのかという議論である。たとえば法律で22週未満と一応は区切られてはいるが、その根拠は特には無い。ただそれ以降は母体の外で生きられると見られているだけであって、それとて何故22週なのかという根拠はないのだ。もし受精の段階から胎児が人となると、これは全く中絶は認められなくなる。なぜならばそれは人を殺すこと、殺人になるからである。それならば中絶を認めさせるためには、どこかで線を引かねばならない。それが線引き論であるが、どこで線を引いたらよいのかということに関しては、結論は出ない。それは人それぞれに判断が違うからであ

る。ところでこの小説においては、この線引き論は展開されていないようである。麻矢たちの議論は、どこまでならば中絶が許されるかではないのだ。そのように受精の段階からの時間的な経過を勘案して、何時までということが問題ではなくて、極めて単純に語ると、胎児が人ではない以上、中絶は許されるという議論を展開しているのである。だから麻矢は胎児のことを、エイリアン、腫瘍そして虫歯と語っている通りである。繰り返すがそこでは線引き論で問題にする時間的な経緯が論点となっているのではない。言わば妊娠の週数という量ではなくて、胎児という質そのものを論じているのである。つまり胎児は「人になる潜在力」をもっているにしても、質的には人ではない。だから中絶は許されるという論理なのである。

それならば麻矢が論じているのは、一体どんな議論であろうか。それがパーソン論なのである。パーソン論とは、単純に記すと胎児はまだ人格を持っていないから、人ではなく、よって中絶は認められるとする議論である。たとえば麻矢が胎児が「変に人間に似ている」というのは広義のパーソン論に入れられるであろうし、先ほど述べた言わば「胎児虫歯説」とも同様にパーソン論に組み込まれるであろう。胎児は質的に言って人ではない。だから中絶は許されるという議論である。それならばこの小説において、結論としては、どう示されるのであろうか。胎児とはいったい人であるのか、またはそうではないのか。そして中絶は許されるのか、許されないのかという問いに、どう答えられているのか。実はこの小説においては、それに対しての答えは出てこない。ただそれをめぐる議論が繰り返されているだけである。

ただここで言えることとは何か。胎児とは、人であるのかないのかという議論を括弧の中に入れても、胎児とはそれだけで価値があるということだ。一体そのような価値とは何か。ある人にとっては人間そのものとしての価値であり、少なくとも「人になる潜在力をもった物体」なのである。そのような価値をもったものを、単純に捨て去ることはできるのかということが問題となってくるのだ。中絶は胎児殺人であるかについて、万人を納得できる答えは与えられないにしても、誰しもが「人になる潜在力をもった物体」であることは認めざるをえない。その故に、中絶する者はそのことに苦しみを持つにいたるのである。

ではこの小説は一体何を示しているのであろうか。中絶が、胎児殺しであるのかどうかという結論は示されていない。そこは結局のところ断念されているように見える。ただこの小説で指し示そうとすることは、結局のところ、産むことの素晴らしさであるように思えるのだ。それは後述しなければならない。

③出生前診断は必要か？

この小説は、中絶するとはどのようなことなのかについて、具体的な描写をもって示し

てはいるものの、いわゆる線引き論は展開されていなかったのではあるが、中絶に関するほぼあらゆる基本的な問題は網羅されているように思える。ところでこの小説が提示する問題で、まだ扱っていない問題がある。それは出生前診断の問題である。

既に述べたように、銀行のキャリアウーマンの川口弥生は、アメリカの精子バンクで「優秀な」精子をネット上で買い求めて、妊娠に至った。その際に産科の守屋医師に出生前診断を勧められ、診断を受ける。その際に当然のことながら、検査について様々な知識を伝達される。彼女はいわゆる高齢出産に属する故に、ダウン症についても十分に説明を受ける。小説にはこうある。

＜弥生は、守谷医師の言葉を、もどかしく聞いた。自分がアメリカから精子をとりよせてまで妊娠したのは、優秀な子供を産むためなのだ。生まれてくる子供には、勉学にはもちろん、スポーツにも才能を存分に発揮し、逞しく、雄々しく育ててほしい。将来は、弁護士か医者、なんでもいいが、社会的に成功して、母として誇れる人間になってほしい。強さとともに、優しさを併せ持つ人間になってほしい。社会生活を送れるのは当然。健康な肉体を持って生まれることは、絶対条件なのだ。＞²⁵

親のある願いがストレートに出ている言葉であろう。そして彼女の場合は出生前診断では特に問題は発見されなかったのであるが、彼女はその後、自分が妊娠した子供が女の子であることを知るにいたり、中絶を決意するのであった。

彼女の場合、障害の有無が問題なのではない。男児か女児かの問題なのである。ただどちらにしても、生まれてくる子供の側からの論理ではなくて、あくまでも親の側の願い（エゴ）が前面に出てくるのである。そのようなことで中絶することが、果たして正しいのかと、この小説は訴え、かつ中絶への道へと安易に導いてしまう出生前診断そのものにも、問題提起をしているように思えるのだ。

3 「中絶小説」の可能性

この小説をめぐる書評の中で、評論家の宮崎哲弥はこの小説をこう評している。この小説こそ「現代小説は倫理を語り得るか。この問いに真正面から答えた作品」であると²⁶。著者もこの指摘というものは正鵠を射ていると思う。はたして現代小説は倫理の諸問題を、そして生命倫理の問題を語り得るであろうか。

著者は、この小説は今まで見てきたように中絶の問題を語ることに成功していると思われる。確かに筋立てとしては問題を感じる点もなくはない。たとえば助産師がいくら中絶を止めさせたいと言っても、自らの守秘義務を放棄して「天使の代理人」なる運動を始めすることはあり得ないし、またそれがこの小説のようにネットワーク化していくことなど、到底考えられない。その故にこの小説を読み進めていっても、今指摘した無理した筋立て

が最後まで読む側の心にあるひっかかりを与えることは否めない。またある女性タレントに対して、「天使の代理人」運動の中で、中絶を思い止まらせることに成功するくだりなどは、出来すぎた話とも思えてくる。しかしながら中絶に関する多くの議論、たとえば中絶が胎児殺人であるのかないのかという議論、パーソン論の範疇にも入れられるような議論も散見され、そして何と言っても中絶という行為が、ストーリーの中で見事に描かれていることには評価できると思われるのだ。

小説『天使の代理人』の作者山田宗樹をめぐる、ある雑誌のインタビュー記事の中で、編集者の言葉としてこの小説こそ「中絶小説」と呼ばれるべきではないかと指摘されている²⁷。まさしくこの小説は、中絶をめぐる様々な問題を小説の中で丁寧に描き、読む側をしてこの中絶という大きな問題を考えさせることを促していると思う。人工妊娠中絶という生命倫理が掲げる一つの大きな問題を、その学説をただ紹介するというのではなく、ストーリーの中で、その問題を描き、かつ考えさせているのである。まさしく「中絶小説」である。

繰り返すが、「中絶小説」とでも呼ぶべきこの小説においては、中絶の是非に対する問いは直接には答えられていない。ただしこの小説の最後のシーンは暗示的である。弥生は精子バンクによって妊娠に至るものの、出生前診断によって生まれてくる子供の性別を知るに至り、中絶手術を受けようとする。しかし切迫流産となり、結局は産むことを決意する。そしてこの小説の最後のシーンは、その子供が成長した場面で終えられていたのであった。再び働き始めた弥生が、住まいの近くの保育室に自分の子供を迎えにいく。弥生は自分の子供を呼びかける。その子供が（当初、弥生が望んだ男の子ではなく、もちろん女の子であるが）母親である弥生のもとに走り寄ってくるのだ。

<弥生は腰をおとし、両手をひろげた。「ママあつ！」未来が歓声をあげながら、駆けてきた勢いそのまま、胸に飛びこんでくる。>²⁸

もちろん未来とはその女の子の名前である。その子供の名前を「未来」とすることで、子供を産み、その子供と共に生きる新しい未来を予感させ、この小説を終らせているのだ。

この小説の作者山田宗樹は、この小説に関するある雑誌でのインタビュー記事の中で、中絶を賛成する側、そしてしない側の「どちらかに与するようなことはやめておこう」²⁹と語ってはいるのだが、やはり子供を産む決断の素晴らしさを知らせようとしていることは明らかである。そしてその視点の中で、中絶をストーリーの中で描写し、登場人物の対話の中で巧みに中絶に関する議論を紹介しているのである。宮崎は書評の中で「複雑な事柄を複雑なままに描ける小説の強みを生かした、全く新しい倫理の書」であると語っているが³⁰、まさしくそれこそが小説の強みなのであろう。複雑な中絶な事柄をそのままに一つの解決を与えるというのではなく（作者は中絶せずに子供を産むという素晴らしさを描いているが、繰り返すがその書き方は押しつけではない。あくまでも作者の一つの視点として描いているにすぎない）、読む側をして、その解決への道を考えさせ、かつ人がど

のように生きるのかという視点を与えてくれるのではないだろうか。

4 我々の倫理学の題材としての小説 —「生命倫理小説」の可能性

生命倫理学の諸問題群を向き合いつつ、人の生命が如何に輝くのかを考察する我々は、どうして「中絶小説」なるものを読むのであろうか。それは我々の倫理学が人が如何に生きるのかを考察し、その故に人生論とも折衝を持つものだからである³¹。人が如何に生きるのかを考察する場合、様々な可能性があるが、何と言っても小説そのものは、そのような考察の重要な対象となるのである。特に生命倫理学が提供している諸問題群は、現在の社会の中でもはや看過することは許されないが、一人ひとりが必ずしも経験し得る問題でもない。そこで生命倫理をテーマに掲げた小説群は格好の学習の場となるのではないか。

たとえばこの『天使の代理人』という「中絶小説」を我々が読み進めることによって、中絶するのかもしれないのかということを自らの問題として、考えることができるのだ。それは女性だけの話ではない。男性も、たとえば自分の周りの女性がその問題に直面する可能性がある訳で、この小説によってそのことを学習することは必要なのではないか。そして我々は改めて知るに至るのだ、女性が中絶ということによってどれ程に苦しんでいるのかということを。そしてその故に、我々はもっとこの中絶という問題を話題に上らせるべきではないか、と考える次第である。その点、大統領選挙の度ごとに中絶が争点となるアメリカという国と、日本という国（中絶天国と呼ばれている日本という国!）との違いも覚えざるを得ないのである。そして避妊の普及や性教育の充実という問題も含めて、我々においても、何とか中絶を無くせるような方向性を作り上げていくことが肝要なのではないか。

そしてまた我々が、中絶ということを考えることによって、我々一人ひとりに与えられている生命というものを、改めて考えさせてくれるのではなかろうか。我々一人ひとりが今この世に生を与えられている事実は、当然のことであるが、我々は親によって中絶させられずに、誕生という関門をくぐってきたことを意味する。そう考えると、自らの生が特別な輝きを帯びてくることを覚えるものである。

そしてこの小説を読むことを通して、我々にとって改めて子供とは何であるのかを考えさせてくれるのだ。弥生がそうであったように、自らの「願望」の故に簡単に中絶という選択をすることが正しいとはどうも思えない。何故ならばやはり子供とは親の欲望の道具ではないからである。子供は子供としての人生を持っているということである。そしてそのような子供と共に、我々がどのような「未来」を切り拓き、そこに人生の輝きというものをどのように見出してゆけるのかということが、改めて問われていると思われる。

生命の輝きと言う時に、一体何がその輝きをもたらすのか。それはその人それぞれの価値観にもよるであろうし、人生観にもよるであろう。しかしたとえば生命の問題を扱った

中絶の問題を考えることによって、やはり生命そのものを直視せざるを得なくなるのだ。その時、我々は単に中絶の是非を論じるだけではなく、たとえば「中絶小説」のような存在を通して、生命そのものの意味、そして人生そのものの意味を考えさせてくれるのではないか。そして自分の生命の輝きとは、如何なるものであるのかをも改めて考察する端緒となり、我々の人生そのものをも見直す機会となる。言わば我々は生き方のレッスンをを行う機会が与えられるのではないだろうか。

それが「中絶小説」なるものの意義であり、そしてそれは生命倫理を扱った小説群、すなわち「生命倫理小説」の意義なのである。

生命倫理の問題群を鳥瞰すると、まだまだ我々が考察していない点が多いことに気づく。既に前述したが、一あえてまたこれらの言葉を用いるが—「生殖医療小説」としての帯木蓬生の『エンブリオ』、また「臓器移植小説」としての加賀乙彦の『生きている心臓』もある。それらの一連の「生命倫理小説」によって、その問題群によって独特に生起される問題提起が、我々の前に示されることであろうと思う。また第一に、臓器移植の問題は、我々の視点からはまだ殆ど論じられていないのだ。そして終末期医療の問題もほんの一瞥を与えただけにすぎない。

我々の倫理学の営為を、ここから一步も二歩も先へと進めなければならないのだ。

¹ それぞれは以下の様に所収。西永兼康「生命の輝きの倫理学(1) —その10の提題—」、『清泉女学院短期大学研究紀要』、第20号、2001年、71-95頁。同「生命の輝きの倫理学(2) —妊娠中絶の倫理的課題—」、『同』、第13号、2002年、65-87頁。同「生命の輝きの倫理学(3) —生殖医療の倫理的課題—」、『同』、第23号、2004年、15-27頁。

² 山田宗樹『天使の代理人』(幻冬舎、2004年)。

³ 帯木蓬生『エンブリオ』(集英社、2002年)。

⁴ 加賀乙彦『生きている心臓(上)(下)』(講談社、1991年)。

⁵ 山田、前掲書、12-13頁。

⁶ 同書、14頁。

⁷ 同書、105頁。

⁸ 同頁。

⁹ ところで前述の拙著「妊娠中絶の倫理的課題」では、従来の中絶に関する論議というものは、中絶の是非にのみ向けられており、中絶を行い「公認されていない悲嘆」の中にくれている女性への視点が欠落しているのではないかと述べた。そして今後「墮胎者論」を展開していかなければならない旨を記したが(84-86頁)、本稿においてその課題に取り組んだことになると考えている。

¹⁰ 山田、前掲書、120頁。

¹¹ そのようなリアルな映像を考える時に、思い浮かべられるのは、プロライフの立場から製作された映画『沈黙の叫び』である(『沈黙の叫び—胎児からのS.O.S.—』、クリスチャンAVセンター)。この映画は中絶というものが、どのように行われるのかということを、実際の超音波断層写真を見せながら説明する。そしてその手術の映像の後には、実際に中絶させられた胎児や嬰兒の写真が短時間であるが映し出される。確かに

強烈な印象を与える映画であるが、たとえば著者が責任を持っているある女子高校でこの映画を見せたところ、本当に気持ち悪くなる生徒が出る程である。

- 12 山田, 前掲書, 123 頁。
- 13 同書, 124 頁。
- 14 同頁。
- 15 同書, 200 頁。
- 16 同頁。
- 17 同書, 202 頁。
- 18 ジュディス・J. トムソン「人工妊娠中絶の擁護」(H.T.エンゲルハート, H.ヨハスほか著『バイオエシックスの基礎 欧米の「生命倫理」論』, 東海大学出版会 1988 年, 82-93 頁)。
- 19 山田, 前掲書, 203 頁。
- 20 拙稿, 「生命の輝きの倫理学 (2) — 妊娠中絶の倫理学的課題 —」, 73 頁以下。
- 21 山田, 同頁。
- 22 同書, 269 頁。
- 23 同書, 200 頁。
- 24 同書, 123 頁。
- 25 同書, 207-208 頁。
- 26 『朝日新聞』, 2004 年 7 月 18 日, 東京版。
- 27 『ダ・ヴィンチ』, 2004 年 8 月号, メディアファクトリー, 41 頁。同様の山田宗樹に対するインタビューは以下の雑誌の記事でも紹介されている。『日経ビジネス アソシエ』, 2004 年 8 月号, 日経 BP 社, 96-98 頁。
- 28 山田, 前掲書, 345 頁。
- 29 『ダ・ヴィンチ』, 同頁。
- 30 『朝日新聞』, 同頁。
- 31 参考: 拙稿「生命の輝きの倫理学 (1) — その 10 の提題 —」, 79 頁以下